

大川氏に対して

近藤（東北大）：shield 層がない時は、海面を surface とし、shield 層がある時は、雲の top を surface とし、Ekman 層を考えたのか確認したい。

片山氏に対して

加藤（海洋研）：SST と大気との先行性を確認したい。

大川：そのとおりです。

西山（函館海台）：海氷が多い翌夏、海面水温が高いのは、海氷が解けて塩分濃度の低い軽い水が、上層に残り、それが日射等により、よけい昇温するためと考えられます。

片山：海域によって違いますが、しいていえば、大気が SST に先行する。ただ北アラスカ海域では、SST が大気を変え、それが海氷状況を変える。

総合討論

藤原（函館海台）：函館海洋気象台では、結氷期、解氷期の子報を1か月位前に出す。これは、基本的には大気が海洋に影響を及ぼすと考えている。

海氷は南北方向の熱交換の媒体として働くので、三陸沖の海水温は、根室海峡から流れ出る海水量と関係がある。海水面積が大きいと冬期の熱の南北交換は、主に大気で行われ、海洋による交換が弱くなるので、夏期の海水温が低くならない。

加藤（海洋研）：海洋の heat balance に関する具体的な解析例はないか。

赤川：私の知る限り日本周辺ではない。データとしては、衛星資料が使えるが蓄積量がまだ少ない。

加藤：船による定期的な観測は行っているか。

西山（函館海台）：夏と冬、業務法にのっとり、定期観測を行っている。1950年代からの平均水温のデータがあり、heat balance の見積もりを行ったが、今後、混合

層を考える必要がある。

加藤：春から夏の混合層の発達期の heat balance の解析を行って欲しい。

孫野（北大）：海水と大気はどちらが先行するかを考える場合、大気と海洋とでは変動のしやすさに違いがあるので、影響の仕方に相違が出てくるのではないか。regional に、たとえば海洋が冷え過ぎると大気はそれを暖めるような気象配置をとることで、全体として balance をとるのではないか。

片山：海水温の保存性がよいので、海水温が大気より先行すると考えがちであるが、実は逆である。regional 以上でかつ数か月以上の scale を考えると、SST と大気の間には負の feedback、海水と大気の間には正の feedback があると考えているので、大気と海洋は緩和作用があると思う。

気象研究ノート 148号「気象の遠隔測定（Ⅱ）」（1983年5月）

目次

静止気象衛星の画像データによる気象要素の抽出……………加藤 一 靖

赤外放射を利用した気象要素の遠隔測定

Ⅰ. 人工衛星および航空機等による測定……………嘉納 宗 靖

Ⅱ. 地上からみた場合の遠隔測定……………宮内 正 厚

ライダー観測による気象要素の測定……………内藤 恵 吉

配布価格

通常会員	1,600円	定期購読会員	1,500円
団体会員	2,400円	会員外	2,700円